

カサリ (憤激して) えい、畜生、去ッちまへ、此うそつき野郎め!

とケルミオを打擲しながら

只食物の名ばかり食べさせやがる。おれを苦しませて面白がつてゐやア
がる汝ら、どいつもこいつも、ひどい、おそろしい災難に逢やアがれ! 去
ッちまへ、えい、去ッちまへ!

と打擲する。ケルミオ逃げて入る。

ペトルキオとホオテンシオと出る。ホオテンシオは食物を盛つた皿
を盆の上に載せて持つて出る。

ペトル おい、ケートちゃんや、どうしたい? : : : おや、おそろしく元氣のない顔を
してるぢやないか?

ホオ 奥さん、お氣分がわるいのですか?

カサリ (力なげに) こんな情けないことッたらありやしません。

ペトル おい、元氣を出したまへ。愉快にして下さいよ。 : : : ケートちゃんや、

こら、御覽。大勉強で、此通り、自身で料理をして、お前のとこへ持つて來
たんだよ。ケートちゃんや、此くらの深切にすりや、禮をいつてくれても
いゝだらう? : : : おや、返辭しないね? ぢや、お前は嬉しいと思はない
んだね。して見ると、大骨折つたのも、まるで無駄か! : : : (わざと憤激して)
こら、此皿を撒げッちまへ?

カサリ (あわてゝ) どうぞ、ま、さうしといて下さい。

ペトル お粗末千萬な御馳走でも、禮をいつて食ふのが定りだ。僕の料理だつて、
食ふなら、禮をいつて貰ひたいね。

カサリ (止むを得ず) ありがたう。(と泣き聲)。

ホオ (わざと氣の毒げに) ペトルキオさん、何のこツてす! あんまりです。 : : : さ、
さ、奥さん、わたしがお相伴します。

と皿を進める。

ベトル (傍白) ホオテンシオ、ずん／＼みんな食ッちまつてくれたまへよ君、苟も僕を愛するならばだ。……これが薬になればいゝが！……ケートちゃん、ずん／＼お食べ。

ケートがつ／＼して食ひはじめる。

ねえ、ケートちゃんや、これからお父さんの許へ、権門豪族よろしくといふすばらしい行装をしてやつて行つて、底抜け騒ぎをやらかさう、絹布の外被だの、最新流行の帽子だの、金の指輪だの、襷襟だの、袖口飾りだの、袴の輪骨だの、肩巾だの、扇子だの、瑪瑙の腕飾りだの、小粒玉だの、何のかのといふ端手なものや無駄なものを飾り立て、ね。え、もう食ッちまつたかい？ 實は、裁縫師が来て待つてゐるんだ、お前の體にくつつけようといふ絹布物を持つて来てゐるんだ。……

此時裁縫師出る。

おい／＼、裁縫師、持つて来たものを出してくれ。上被てのを見せな。

此時小間物屋も出る。それを見て

汝は何しに來たのだ？

小間 (帽子を出して見せて) これが旦那さまのお命じになりましたお帽子でございませす。

ベトル (目を見張つて) おツやく／＼！ こりや粥の椀か何かを型にでもして製つたんだらう。まるで天鷲絨でこしらへた鉢だ！ こんなものが爲様があるもんか！ たまらない。こりや帆立貝のお化けだ。胡桃よろしくだ。まるで饅頭だ、玩具だ、赤んぼの帽子だ。えい、こんな物持つてツちまへ。(と叩き附けながら) もつと大振なのを持つて來い。

カサリ (こらへかれて、口を出す) わたし大きいのはいや。さういふのが今流行り

ベトル ますの。上品な夫人達はみんなさういふのを冠りますの。
上品な奥さんになつてからお冠り、今はまだいけない。

ホオ (傍白) それは急がないがいよ。

カサリ (こらへかれて、佛然として開き直つて) もし、あなた、一言いふのを許していたゞ
きませう。是非はせていたゞきます。わたくしは子供ぢやありません、
赤んぼぢやありません。あなたよりも身分の上の人でもわたくしには思
ふ存分のことをいはせてくれました。若し聴くに堪へないと思ひです
なら、耳をふさいでいらつしやい。心中の怒りをいはないぢやをられ
ません、無理に押しかくしてゐれば、此胸が張裂けてしまひますから。胸
の張裂けるのを待つてくるなら、わたしは思ふ存分の事を、好きなや
うに言つてのけます。

ベトル (わざと聞きちがへたやうにして、快活に) 成程、こりやお前のいふ通りだ。實際、

全く、取るに足らん帽子だよ。鶏卵菓子の上皮よろしくだ。玩具だ。絹
の饅頭だ。これを好かないといふに至つて、頗る僕の妻たるに適するね
え。

カサリ 適しようと適しまいと、わたしはその帽子が好きです。わたしはそれを
取ります、でなきや要りませんよ。

此夫婦の權幕に、小間物屋は愕いて、匆々に逃げるやうにし
て入る。

ベトル (一切平気で) 上被はどうするね? さうく。おいく、裁縫屋、さ、出して
見せな。……

裁縫師持つて来た新調の上被を擴げて見せる。
おや、どうだ、ま、これア! 何といふ假面舞踏會にでも使ひさうな代物だ
い? 何だこれは? 袖か? まるで大砲の筒口のやうだ。どうだ、上

も下も林檎饅頭よろしくといふ風に、縦横無盡に、や、裁つたわ、切つたわ、まるで以て、あの、理髪店の香爐の穴だらけの蓋だ。え、裁縫屋、一體全體、何てもんだ、こりやり。

ホオ

(傍白) 此様子ぢや、帽子も上被も妻君の手に入りさうにない。

裁縫

今の流行向きに具合よく仕立てるといふお吩咐でございましたんで。

ベトル

無論、さういひつけた。けれども、こんな見ツともないものを誰れがこしらへろといひつけるもんかい！……えい、溝を飛んで歸つて行きやアがれ、だれがそんなものを買ふもんかい！ 只の一枚だつて買やしないぞ。去ッちまへ！ えい、早く去け。

カサリ

(欲しくてたまらぬので、こらへかれて) わたしは、そんなに好い風に、氣持よく流行向きに出来てるのはまだ見たことがありませんの。大變好い具合に出来てるんですよ。……あなたはわたしをば偶人扱ひになさるんでせう。

ベトル

(わざと聞きちがへた體で) 全くだ。奴め、まるでお前を偶人扱ひにしてゐる。

裁縫

(驚いて真面目に) 奥さんは、あなたさまが奥さんを偶人扱ひになすつていらつしやるとおつしやるのでございます。

ベトル

(わざと憤激して) けしからんことをいやアがる、此無禮者めが！ うそを吐け、此絲屑野郎の、指拔野郎の、三尺野郎の、二尺野郎の、一尺五寸野郎の、八寸野郎の、二寸野郎め！ うぬ、蚤、蛆、冬の蟋蟀め！ おれの家へ来て、東絲なんか振廻しやアがつて、威張るのか？ 去ッちまへ、襤褸野郎の、切れッ端野郎め！ 早く出て行かんと、汝の尺度で以て撲り附けるぞ、生きてる限りは喋舌らうと思つてやがるだらうから。やい、よくもこんな出来ぞこなひを持つて來やがつたな。

裁縫

それは且那さまのお考へちがひでございませう。此お上被は、主人が御注文をいたゞきました通りに出来てをりますのです。グルミオさんが御注

文にいらつしやいましたのでございます。

グルミ 注文なんかいたしやしません。反物を持つてつたばかりでございませぬ。

裁縫 だつて仕立てるとおつしやいましたでせう？

グルミ さうさ、針と糸だけは使へといつたよ。

裁縫 裁てとおつしやいましたらう？

グルミ おい、君は飾りを附けるのが専門だらう。

裁縫 はい、さやうでございませぬ。

グルミ だが、言ふことに飾りを附けちやアいけないよ。君はいろ／＼の物を拵

へたらう、けれども拵へ事をしちやいけないね。わつしは容易にごまか

されないよ。ねえ、わつしは旦那が此布を断てとおつしやつたといつた

けれども、そんなに滅茶々に切れたアいやアしねえんだ。だから、君は

嘘オ吐くんだ。

裁縫 でも、こゝに、證據のお書附がございませぬ。

ペトル 読んで見な。

グルミ 若しかそれにわつしがさういつたと書いてありや、其書附が大嘘吐きだ。

裁縫 (讀む)「第一、上被は寛り仕立の事」……

グルミ 旦那、寛り仕立なんていふ筈はねえんです。若しかそんなことをいつた

んなら、其裾へわつしを縫込んで、糸卷の心で叩ッ殺しておくんなさい。

ペトル (裁縫師に)それから。

裁縫 (讀む)「螺形の小さき肩かざり附き」

グルミ 肩かざりとはいつた。

裁縫 (讀む)「袖は靴形」

グルミ 袖は二つだとは、たしかに言つた、

裁縫 (讀む)「袖の仕立は風變りの事」

ペトル それが、それがたまらないのだ。

グルミ 其書附が間違つてますよ、其書附が！ わつしはね、袖は一旦裁つた上で、

又縫合せてくれといひつけましたんです。さ、これア何處までも明を立

てねえちやおかねえよ、小指に指貫の鎧なんか着せて威張つてたつてかま

ふもんかい！

裁縫 手前の申すことには間違はございません。出るところへ出りや、お前さん

にだつて、分りませう。

グルミ さ、すぐにでも敵手にならア。さ、おめえは其書附を持つて向つて來な。

其尺度はこつちへ貰はう。さ、打つて來い。

と身構へする。

ホオ やれ〜、グルミオさん、さういふ段取ぢやア、裁縫屋にや勝身はないね。

ペトル とにかく、その上被はおれにや入用はない。

グルミ 旦那、そりや御道理です。奥さんのですもの。

ペトル (裁縫師に) 店へ持つてつて、親方に何かにしろといへ。

グルミ (裁縫師が上被を取上げようとするのを止めて) やい、持つてつちやいけねえ。こち

らの奥さんの寢衣をうぬらの親方に使はせてたまるもんか！

ペトル なんの洒落だそれは？

グルミ お氣が付きませんか？ 奴の親方に奥さんの寢衣を使はせるなんて！

と、とんでもないこつちやござんせんか！

ペトル (ホオテンシオに小聲で) ホオテンシオ、支拂は後でしてやるといつてくれたま

へ。……(裁縫師に、大きな聲で) えい、早く持つてけ。去ツちまへ。もう物をい

ふな。

ホオ (裁縫師へ小聲で) 上被の支拂は明日してやる。がみ〜言はれたからつて、

心配するにや及ばないよ。早くお歸り！ さ。親方へよろしく。

裁縫師入る。

ペトル さ、さ、ケートさんお父さんのところへ往かう。此、粗末だけれども、正しい服のまゝで往かう。財布の中が裕がでさうして立派なら、着物の貧弱はかまつたこつちやない。肉體を富ましむるものは精神也だからね。譬へば太陽の黒雲間に輝くが如くに、名譽はどんな粗服の中からも顔を出すよ。檀鳥を雲雀よりも貴いとはいへまい、羽根が美しいからつて？ 蝮を鰻よりも人が好くかい、皮の彩色が綺麗だからつて？ いゝえ、決して。お前だつてさうだ、道具が貧弱だらうが、着物が粗末だらうが、それで値打は下らないよ。若しそれを恥かしいと思ふなら、みんな僕の故になさい。だから、陽氣に。すぐにこれからお父さんのところへ往つて、宴會を開いて、大浮かれに浮かれよう。……さ、家來を呼べ、すぐに掛けるんだ。馬は二疋ともロングシーンの出はづれへ牽出しとけ。あそ

こで騎るから。あそこまでは歩いてゆかう。かうつと。もう七時頃らしい。多分食事時には行き着かれるだらう。

カサリ あなた、もう大丈夫二時頃です。あそこへ行くまでに夕食時になりませう。

ペトル (頑固に) いゝえ、馬に乗る頃までに七時になるだらう。(不興げに) とかくお前は僕のいふこと、すること、しようと思ふことに反對ばかりする。……やい、うツちやつとけ。おれはもう今日は往かない。往く前に、おれがさうだといふ時間にならなけりや承知しない。

ホオ やれ、此豪傑は太陽にまでも號令を下さうとしてゐる。

皆々入る。

第四場 バデユア バプチスタの邸の前

ツラニオとギンセンシオに假装したる村學究と出る。

ツラ こゝが其邸です。訪問しませうか？

村學 (物體ぶつて)勿論だ。多分バプチスタさんは記憶してをられるだらう、約二十年前にゼノアの天馬館に同宿してゐたんだからなう。

ツラ けつこう。油断なくやつて下さいよ、親父らしい嚴格な様子をして。

村學 大丈夫です。

ピオンデロー 出る。

ツラ あそこへあなたのお父さんが来た。呑込ませとかなけりやいけますまいぜ。心配なさるにや及びません。……おい、おい、ピオンデロー、お前の役目をう

まくやつてくれ、この人を眞物の親父だとおもつてね。

ピオン 大丈夫ですとも。

ツラ バプチスタさんへ傳言したかい？

ピオン あなたのお父さんがエニスへ来てゐなさんるんで、今日にも此バデュアへ着

きなさんるだらうと、あなたが俵つておいでだと、さういつとききました。

ツラ 御苦勞々々々。(と村學究の手前、わざと金をやつて)こりや飲代だよ。……あそこ

へバプチスタが見えた。(村學究に)おちついて！

バプチスタとルーセンシオと出る。

バプチスタさん、よいところでお目にかゝりました。(村學究に)これがお話した方です。お父さん、さ、わたしの爲に、ピヤンカを、代々の家産を繼

村學 がせるわたしの妻として、迎へて下さい。ま、お待ち！……え、御免を蒙りまして、手前は、今度、或負債取立のため

に、當地へ参りましたところ、倅ルーセンシオより御息女と彼れとの間の戀愛に關する重大の件を承はり及びました。ところで、御芳名は豫て承知の事でもあり、倅は御息女を思ひ、御息女も倅を思つてをられる事でも

あり、かたぐ、餘り倅に氣を揉ませませないために、父親の情として、すぐにも結婚いたさせたく存じます。で、若し別段御異議がございませんければ、相當のお約條によつて、直ちに御息女への遺産を取りきめてしまひたいと存する次第です、豫て芳名を承はつてをるハプチスタさんに對して、かれこれ七むづかしい條件を申し出すにも及びませんから。

ハプチ

え、失禮ながら、簡單明瞭なお言葉が甚だ氣に入りました。全く其通りです、この御息のルーセンシオさんは我女をお愛しなされ、我女もまた御息を愛してゐると見受けます、でなければ外面を甚しく拵へてゐなさるのだと思はねばなりません。ですから、御親父らしく、御息のために、相當の資産を嫁に譲るとだけおつしやつて下されば、縁談は整つて、萬事が事済みとなります。御息に我女をさし上げることを承諾します。

此間ツラニオはカンピオのルーセンシオに目ませをして微笑し

つゝ

ツラ

ありがたうございます。ちや、どこで結婚の約束をしたり、双方の契約書の取交しをしたり、したものでせうか？

ハプチ

ルーセンシオさん、わたしの宅はいけない。といふのは、水注子にも耳でね、家僕どもが、大勢ゐますからね。それに、あのグルミオ爺さんが始終聞耳を立てゝゐますから、どんな邪魔をされまいものでもないから。

ツラ

ちや、わたしの假寓でしませうか、それでよろしければ。父も同宿してゐます。あそこで、今晚、そつと首尾よく事を運んでしまひませう。このお召使に（ルーセンシオへ思入をして）嬢さん呼びにおやりなさいまし。手前の僕に代書人を呼ばせませう。只困つたことは、事が急ですから、祿な御食事の準備が出来さうにありません。

ハプチ

けつこうです。……（ルーセンシオに）カンピオ、お前さん急いで往つて、ピヤン

カに、すぐ準備して来るやうに言つて下さい。さうして、都合により、事情を話して下さい、ルーセンシオの親父さんが當市へ着かれたについて、彼女はルーセンシオさんの妻になることにきまつたらしいといふことを。

ルーセンシオ 入る。

ピオン

(傍白) どうか首尾よくさうならつしやりますやうにだ！

ツラ

(ピオンデローに) おい、神さまにふざけてゐないで、早く往きな。……

ピオンデロー 立離れる。

バプチスタさん、御案内しませう。圖らずお招きする次第なんで、たつた一皿式のお饗應でせうよ。さ、さ。いづれ、ビザでお埋合せをします。

バプチ

お伴します。

ツラニオと村學究とバプチスタと入る。

ピオン

(既に遠く離れたるカンピオのルーセンシオを呼戻す) カンピオさん！

ルーセンシオ 戻つて来る。

ルー

何か用かい、ピオンデロー？

ピオン

わつしの旦那があなたに目ませをしたり、笑ひ顔を見せたりしましたらう？

ルー

ピオンデロー、それがどうしたい？

ピオン

なアに、何でもありませんがね、つまり、その謎の説明役にわつしを残してつたのです。

ルー

どうぞそれを説明してくれ。

ピオン

ぢや、申します。バプチスタさんは大丈夫ですよ、大うそつきの息子さんの詐欺物の親父さんと話最中ですから

ルー

で、どうしたの？

ピオン

其娘さんをあなたが夕食の席へお連れになるんですよ。

ルー それから？

ピオン セント・ルークの教會のあの年寄の僧さんは、いつだつて御用を勤めませアね。

ルー で、それがどうしたといふのだ？

ピオン さア、そりや知りませんや。とにかく、ごまかしの約定の取交しをやつてるのです。あなたは娘さんとの取交はしを素早く教會でやつておしまひなさい、版權單獨専有て奴を！ 僧さんと書記役と二三人の相當な立合人を連れていらつしやい。……これが豫てお望みのことでないのなら、もういふことはありません。ピヤシカさんに永久にさよならをおつしやるが

と行きかける。

ルー おい、ピオンデロー！

ピオン

ぐづつかしちやゐられませんや。南京兎に食はせる和蘭芹を畑へ取りに往つた娘ツ子が、其晝過に、嫁ツ子になつたのを知つてますからね。あなたも同じくかも知れない。ぢや、さよなら。旦那はね、セント・ルークの教會堂へ往つて、僧さんを呼んで来いといひました、あなたが附き物をつれて、やつて來なさるまでに。

ピオンデロー 入る。

ルー

彼女に異存さへなけりや、さうもなる、さうもしよう。多分喜ぶだらう。とすれば、何も心配するにや當らん。どうならうとも、とにかく單刀直入に話して見よう。迎も彼女に離れてゐられるもんぢやアない。

入る。

第五場 公道

ペトルキオとカサリナとホオテンシオと家僕らと出る。

ペトル (急ぎ足で、先に立つて、活潑に歩みながら) さ、おいで。いよ、又、お父さんの家へ来たぞ。どうだ、すてきの良い月ぢやアないか？

カサリ (呆れて) 月ですと！ 太陽ですよ。月夜ぢやありません。

ペトル (大真面目で) なアに、月だよ。

カサ なんの、太陽ですよ。

ペトル (忽ち憤激して) いや、誓つてあれは月だ、さうか星だ、さうでないまでも、お父さんの家へ行き着くまでは、是非ともおれがさうだといふ物でなくちやならん。…えい、馬を二疋とも引張り戻しツちまへ。…しよつちう反對ばかりしてゐる。反對する外に藝はないのだ！

ホオ (カサリンに) 逆はないでいらつしやい。さうでない、いつまでも往かれやしません。

カサリ (餘儀なくペトルキオに) こゝまで来ましたんですから、さ、参りませうよ。月でも、太陽でも、何でもようござんす、葭の蠟燭でもようござんす。わたくしもこれからさういひませう。

ペトル たしかに月だよ。

カサリ はい、月です。

ペトル ぢや、お前は嘘を吐くんだ。太陽だよ、無論。

カサリ (力のない聲で) では、成程、太陽なんです。けれども若しあなたがさうぢやないとおつしやれば、太陽ぢやないのです。月はいろくくに変ります、あなたのお心のやうに。あなたがお呼びなさらうと思し召す通りに變ります。さうして其通りになれば、わたくしも其通りに呼びますのです。

ホオ (傍白) ペトルキオ、さつさとお進み。道はもう切開けたよ。

ペトル さ、進んだりく！ 重りの方へ球の走る鹽梅は拙かアないぞ。…一寸

待つた！ だれか来た。

ルーセンシオの父、眞物のギンセンシオ旅姿にて出る。白髪の老紳士である。ペトルキオはカサリンをからかふにいゝ材料だといふ思入、だしぬけにギンセンシオに呼び掛ける。

や、今日は、お嬢さん。どちらへお出かけです？ (ギンセンシオの呆れるのにまはす、カサリンを見返つて) ねえ、ケートさん、あんな若々、艶々とした娘さんを見たことがあるかい？ ねえ、ほんとの事をお言ひ。頬の色なんかまるで白と紅との戦争だらうぢやアないか？ あの輝く二つの目は天上に鏤められた星以上の美しさぢやアないか？ ……美しいお嬢さん、もう一度改めて御挨拶いたします。…ケートさん、あんまり可愛らしい方だ、抱いておあげ。

ホオ (傍白) あんなことをいつて女扱ひにしてる。あの爺さんびつくりして氣が

カサリ

ちがふかも知れない。

(ふんどころなく、ギンセンシオに) お美しい、可愛らしい、お齡の若いお嬢御さん、どちらへ？ お宅はどこです？

かういふ美しいお子をお持ちの御両親はお幸福です。

あなたのやうな可愛らしいお方をお寢室の友になさる運星のよい男の方はお幸福です？

ペトル

おやく、どうしたのだ、ケ



カサリ

ト！ 氣がちがつたのぢやないか？ こりや男だよ、皺くちやの、やせッこけたお爺さんだよ。お前がいふやうな娘なんかぢやないよ。お年寄さん、御免なさい、太陽の光線で目が眩んでゐたもんですから、何もかも悉皆黄ばんで見えたりして、見ちがへたのです。やつと今、お年寄さんだといふことが分りました。御免なさいまし、とんでもない見ちがひをいたしました。

ペトル

免してやつて下さい、御老人。時に、どちらへ御旅行です？ 同じ方角へなら喜んで御同行しませう。

ギンセ

あなた并びに面白い奥さん、實はあんまり思ひがけない御挨拶を承はつたので、非常に驚いたわけでございましたが、手前はギンセンシオと申すもので、ピザに住んでをりますが、只今パデューアへ参るところです。久しく會ひません倅があそこにあますから、訪ねます積りで。

ペトル

御子息のお名前は？

ギンセ

ルーセンシオといひます。

ペトル

いゝところでお目にかゝりました。御子息の爲には一層好都合です。ところで、法律上からも、年齢上からも、わたしはあなたをお父さんと呼ぶのが當然です。わたしの妻の此婦人の妹とあなたの息子さんが、もう今頃は結婚なすつた筈ですから。びつくりなさるにも及ばなけりや、お歎きなさるにも及ばん。それは評判のいゝ娘でもあり、持参額も十分だし、家柄も立派です。のみならず、どんな貴人の妻としても恥かしくない資格をも備へてゐるのです。お父さんのギンセンシオさんを抱擁します、さ、これから一同で、ぞろ／＼御子息を訪問することにしませう、あなたの來られたのを嘸お喜びなさるでせう。

ギンセ

だが、それはほんとですか？ 御戲談ぢやありませんか？ ふざけた旅の

人がよくやるやうに、出逢ひがしらの者にかからかふんぢやありませんか？
御老人、全くですよ、わたしが保証します。

ベトル さ、一しよにおいでなすつて、實證を御覽なさい。とつはじめに戲けたも
んだから、疑つてゐなさるんだ。

ホオテンシオだけ残り皆入る。

ホオ (獨自)ベトルキオ、お庇で勇氣が附いたよ。後家さんに着手して見よう。

若し敵手が剛情であるやうなら、蠻から式にやるに限るといふことは、ベ
トルキオ、君に教はつたんだよ。

はひ
入る。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

第五幕

第一場 バデュア ルーセンシオの家の前

グレミオ出てゐる。とピオンテローとルーセンシオとビヤンカとが
出る。三人はグレミオを見附けぬ體、グレミオは三人を見ぬ體。
三人はグレミオの後ろを通りて出る。

ピオン しづかに、お早く。僧さんはもう來てますのですから。

ルー おれは飛んでるんだよ。だがね、家で汝を呼んでるかも知れないから汝
は歸つてゆきな。

ピオン　いゝえ、お式の濟むのを見てから歸ります。さうしてから大急ぎで歸つて行きます。

ルーセンシオとピヤンカとピオンテローと入る。

グレ　(獨自)どうしたのだらう？　まだカンピオがやつて來ない。

ペトルキオとギンセンシオとグルミオと出る。從者ら從ふ。

ペトル　こゝが扉口です、これがルーセンシオの家です。舅の宅はもう少し市場寄です。そこへ往かんけりやありませんから、わたしはこゝでお別れます。

ギンセ　いや、おいでなさる前に一杯あがらないわけにはいきませうまい、こゝでお待ちをいたすやうに命じたいと存じますから。多分、何か準備をしませうから。

と扉口に近づきて叩く。中々返辭をしない。

グレ　(ギンセンシオに)内は取込中ですから、もつと強くお叩きなさい。

ギンセンシオ　又叩く。と例の村學究(似せ者のギンセンシオ)窓から顔を出す。

村學　だれだ、扉を破れるやうに叩くのは？

ギンセ　ルーセンシオさんはゐますか？

村學　ゐます、けれどもお會ひするわけにはいきませぬ。

ギンセ　百ポンド、二百ポンドといふ金を持つて來て、喜ばせようとする者があつてもですか？

村學　何百ポンドでもそつちへしまつときなさい。そんなものに用はない、わたしが生きてる限りは。

ペトル　(ギンセンシオに)息子さんは、此バデュアで、非常に可愛がられておいでだと、わたしがいひましたらう。……(村學究に)もしく！——くだらん儀式言葉

は止して——ねえ、どうぞルーセンシオさんにさういつて下さい、御親父さんがピザから見えたのです、お會ひにならうといふので、此戸口へ来ておいでよす。

村學 嘘を吐きなさんな。ルーセンシオの父は、とうにバデューアから来て、こゝに斯うして、窓から顔を出してゐるぢやアないか？

ギンセ ぢや、お前さんが、その、お父さんですか？

村學 さやう。さう阿母はいひます、ほんととかどうだか知らんが。

ペトル (ギンセンシオに) え、こりや、どうしたといふのです？ 非常によくないこつ

てすねえ、他人の名を騙るなんざア。

村學 其奴をつかまへて下さい。多分わたしの名を騙つて、當市で何かわるいことを働かうとしてゐる奴に相違ない。

ピオンテロー出る。

ピオン

(獨白) 教會で式を擧げなさるのを見たが、どうか幸福であんなさるやうに！……おや、だれだ？ 大胆那のギンセンシオさまだ！……さ、しまつた、何もかも駄目だ。

ギンセ

(ピオンテローを見附けて) こゝへ來い、此首縊られ野郎め！

ピオン

參らなくつたつてよからうと思ひます。

ギンセ

こゝへ來いといふに。汝はおれを見忘れたか？

ピオン

見忘れたかつて？ いゝえ。見忘れる筈はありませんや、生れてからま

だ一度も見たことのないあんたですから。

ギンセ

何だと、此惡黨めが！ 主人の父のギンセンシオを見たことがない？

ピオン

何ですと、御主人の大胆那さまだつて？ はい、それなら知つてまさ。あ

れ、あそこの窓から顔を出してござらつしやる。

ギンセ

うぬ、本氣でいつてるのか？

とピオンテローをつゞけさまに撲つ。

ピオン 助けてくれ！ 助けてくれ！ 氣ちがひの人殺しが来た！

村學 助けてやつてくれ！……バブチスタさん！ バブチスタさん！

と叫びつゝ窓から顔を引ツこまます。

ペトル ねえ、ケート、脇へ寄つて、此喧嘩の成行を見ようよ。

ペトルキオとカサリンと退く。

村學 究平舞臺へ出る。ツラニオ、バブチスタ、家僕らもつゞいて出る。

ツラ (ギンセンシオに) だれですあなたは？ 手前の家來をお撲ちなさるなんて！

ギンセ わたしをだれだつて？ さういふお前さんこそだれです？ (と顔を見て) お

ツや／＼／＼！ (ツラニオの服装の立派なのをつゞく見て、呆れ果て) この上等仕

立の下男め！ 絹下着め！ 天鷲絨細袴め！ 赤外套め！ 尖頭帽子め！

……あゝ、おれの身代はめちや／＼だ！ 身代はめちや／＼だ！ おれが

一生懸命に、宅で儉約をして金を溜めてゐる間に、伴と家來めが大學校へ

往つてゐて、めちや／＼にそれを使ッちまやがる。

ツラ どうしたのです！ 一體どうしたといふのです？

バブチ え、其人は狂人ですか？

ツラ (ギンセンシオに) もしく、あなたは、見受けたところは、眞面目な、立派な御

老人と見えるんですが、おつしやることは狂人と思はれません。え、

わたしが、眞珠や金を身に附けてゐようと、それがあなたにどういふ關係

があります？ わたしは親父のお庇で斯うしてゐるのです。

ギンセ 親父のお庇で！ 此野郎！ 汝の親父はベルガモーの帆布織だ。

バブチ 人ちがひですよ、そりやきツと、人ちがひですよ。あの仁の名を何といふ

とお思ひなさる？



ギンセ あいつの名を！ 知らなくって

どうするものか？ 三歳の齡から育て、やつたんだ。ツラニオといふ名です。

村學

えい、去ッちまへ〜、此馬鹿氣ちがひめ！ これの名はルーセンシオだ、わしの一人息子だ、わしの、此ギンセンシオの所領地一切の相續人だ。

ギンセ

ルーセンシオだ！ …お、ぢや、おのれ、主人を殺しやアがつたのだな！ …そいつを捕

へて下さい、そいつを、公爵の嚴命です。…お、伴、伴！ …やい、畜生、

おのれ、伴のルーセンシオは何處にゐる？

ツラ

役人を呼んで來な。（此途端役人出る。）此狂人を牢へつれてつて下さい。（バ

プチスタに）お父さん、こいつを裁判所へしよびいて行くやうにして下さい。

役人 ギンセンシオに立ちかゝる。

ギンセ

（呆れ且つ怒つて）牢へおれをつれて行く！

グレ

（役人に）お役人さん、ま、お待ちなさい。其人が牢へ入れられる筈はないの

です。

バプチ

グレミオさん、黙つておいでなさい。牢へ入れんけりやなりませんよ。

グレ

御注意なさい、バプチスタさん、お騙されなさるな、あの人が眞實のギンセンシオさんですよ、誓言しますよ、敢て。

村學

（居丈高に）敢て？ ぢや、誓言して見なさい。

グレ (恐れて) いんにや、誓言はしません。

ツラ ぢや、わたしをルーセンシオでないなんぞといはないがい、ぢやないか？

グレ (凹んで) さやう、あんたはたしかにルーセンシオさんです。

バプチ (グレミオを睨んで、家僕らに) えい、この老老爺をそつちへつれてツちまへ。……

その男は牢屋へ！

これにて役人又ギンセンシオを引立てようとする。

ギンセ 他國者はとかく斯んな目に逢ふもんだ。……(ツラニオを睨んで) お、實にけしからん不埒な奴だ！

ピオンテローを先にルーセンシオとビヤンカと出る。

ピオン お、こりや破壊です！……あそこにお父さまがおいでです。知らん振をなさい、他人あしらひになさい。で、なけりや、萬事休すです。

ルー (ギンセンシオの前に膝まづいて) お父さま、どうぞお免し下さい。

ギンセ (驚き喜んで) お前、生きてゐてくれたか！

此體を見てピオンテロー、ツラニオ、村學究らは大急ぎで逃げて入る。

ビヤン (バプチスタに取纏つて) お父さま、どうぞお赦し下さいまし。

バプチ (解しかれて) お前がどういふ不都合をしたのです？ ルーセンシオさんは何

處へいつたい？

と四邊を見廻す。

ルー (其前へ進みて) こゝにをります。眞實のギンセンシオの眞實の伴です。偽

物があなたの目を眩ましてゐました間に、令嬢と結婚式を済ましてしまひ

ましたのです。

グレ (呆れて) こりや眞赤なくらみごとだ！だれもかも欺瞞されてゐたのだ！

ギンセ (尙ふりく怒つてゐて) あの惡黨野郎のツラニオめは何處へ往きやがつたか？

此事でおれに反抗しやがつたツラニオめは？

バフチ

え、こりや、どうしたのだい、(ビヤンカに)ありや宅のキャンピオぢやないか？

ビヤン

キャンピオさんがルーセンシオさんに變つたのです。

ルー

戀愛の力が斯ういふ奇蹟を起さしめたのです。ビヤンカさんの愛の力が

わたしとツラニオとの身分を取換へさせたのです。當市では彼れがわたし

に成代つてゐたのです。で、望みの如く、幸福の港へ到着することを得た

のです。ツラニオのしたことは、悉皆わたしが無理にさせたのですから、

お父さん、どうぞ赦してやつて下さい。

ギンセ

(尙怒りを忘れかれて)あいつの鼻ツ柱を殺いでくれる、……おれを牢屋へ入

れようとしやアがつた。

バフチ

(ルーセンシオに)おい／＼！ だが、お前さんは、わたしの承諾を乞はないで

我女と結婚をしたんだね？

ギンセ

バフチスタさん、御心配なさるな。きつと御満足なさるやうにしますよ。

けれども、今の不埒は決して此儘にしちやおかないぞ。

と入る。

バフチ

わたしとても、とくと此わるだくみの取調べをしなけりやならん。

と入る。

ルー

ビヤンカさん、そんなに蒼くなるにや及ばないよ。お父さんは怖い顔な

んかしやしないよ。

ルーセンシオはビヤンカを慰めつゝ、入る。

グレ

(つまらなさうに)おれの麵麩だけは生だ。けれども同じやうに引込まう。何

もかも駄目だが、御馳走にだけは有りつけるだらう。

入る。

今まで一隅に退いて此様子を傍観してゐたハトルキオの一

連が此時前へ出る。

カサリ あなた、従いてつて、此騒ぎの成行を見ませうよ。

ペトル 行く前にキッスをおしよ、ケートさん。

カサリ え、此街の中で？

ペトル おや、おれを嫌ふのか？

カサリ いゝえ、さうぢやないの、決して。けども、街の中ですもの。

ペトル (怒つて)ぢや、宅へ歸ツちまはう。……おい、こら、歸るんだぞ！

カサ (餘儀なく)ぢや、キッスしますよ。さ、どうぞ、歸らないで下さい。

キッスをして

ペトル

ね、いゝぢやないか？……さ、さ、ケートちゃん。爲さゝるは爲すに如かず、曾て晩きことなした。

皆々入る。

第二場 バデユア ルーセンシオの宅

ハプチスタ、ギンセンシオ、グレミオ、村學究、ルーセンシオ、ビヤンカ、ルトルキオ、カサリン、ホオテンシオ、後家某、ツラニオ、ビオンデロ、グルミオら出る。ツラニオと同道の家僕連は一寸した飲食品を持込む。

ルー

外れ通しの亂調子が、これでまづ、やつとこさ合つたといふものだ。激戦が済んで、危いところを免れた話をして、笑ひ合ふ時が来た。……ビヤンカさん、わたしのお父さんを歓迎して下さい、わたしはお前さんのお父さんをおもてなしするから。……ペトルキオ兄さん、カサリナ姉さん、それから御親愛の後家御さんを御同伴のホオテンシオ君、有り合せの最良品で一盃やつて下さい。よく来て下さつた。わたしの宅の此小宴會は大饗宴後に

於ける胃腑の不足分を補ふに過ぎないのです。諸君、どうか御着席下さい。これからは坐つて、喋舌つて、食ふのが目的ですから。

ペトル さやう、坐つてさうして食ふより外には爲方がないのだ。

バプチ (ペトルキオに) 婿どの、此深切はバデュアが供するのですぞ。

ペトル いかにも、バデュアは只一に深切のみを供してくれます。

ホオ (二寸未亡人を見返つて) われ〜二人の爲にも、それが事實であるやうにした
いものです。

ペトル ホオテンシオは大分後家さんを恐怖に及んでるね、たしかに。

後家 (恐怖といふことを威嚇といふやうな意味に取りちがへて腹を立つて) わたしが恐怖されてますつて? 人を!

ペトル あんたは聰慧な方だと聞いてたのに、そんな風にお聴取りなさるのは、少々早計過ぎますよ。わたしは、ホオテンシオがあんたを恐怖してるとい

つたんですよ。

後家 (尙ぶり〜して、皮肉に) 平素眩暈がして困つてる人でもものは、世界ぢうがぐる〜廻つてるやうに思ふものです。

とカサリンを尻目にかけて、ペトルキオへ當て附ける。

ペトル (平氣で) よう! 侃々諤々の御挨拶だ。

カサリ (こらへかれて、開き直つて後家に) 奥さん、只今のお言葉の意味はどういふのでござりますか?

後家 (冷然と) ペトルキオさんの事を思つて、申したの。

ペトル (思ふの意味をわざと誤解して) え、わたしの事を思つて、下さる! ホオテンシオさんの前ぢやア、少々おさしあひぢやありませんかね?

ホオ (眞正直に) なアに、後家さんは、君の事から類推して、只さう思つてたといふだけの意味なんだよ。

ペトル 修正、妙！ 其報酬にキッスしておやんなさいよ、後家さん。

カサリ (むづかしい顔をして尙も後家に)「眩暈がして困る人でものは、世界ぢうがぐるく廻つてるやうに思ふものだ」とおつしやつた其意味の御説明を承はりませう。

後家 (向き直つて、喧嘩腰で) あなたの夫君はね、名代の悍馬に苦みぬいていらつしやるんだから、それで、御自分を尺度にして、我夫も同じ難儀をしてるだらうとお思ひなさるんのですのよ。斯う申したら、わたしの意味が分りませう。

カサリ (皮肉に)はい、随分劣等だといふことが分ります。

後家 (しつぺい返しに)全く、あなたがねえ。

カサリ (又しつぺい返しに)え、あなたに比べれば、遙かに劣等ですよ、劣等たることの程度がね。

ペトル (此言ひあひを面白がつて)ケート、おっし〜！

ホオ (これも同じく)後家さん、おっし〜。

ペトル (衆人を見返つて)保証、百マルク！ ケートは必ず後家さんを押倒します。

ホオ (頓智問答式にペトルキオに)そりや僕の役だ。

ペトル (笑つて)よう！ お役人(男妾)らしい口吻だ。…参るぞ。

といひつゝ、祝盃をホオテンシオのために擧げる。

バフチ グレミオさん、どうです、あの手合の洒落のめすことは？

グレ まるで以て頭脳と頭脳のぶつつけくらですよ。

ピヤン (浮かれて、つい引込まれて)丸太を頭へくつつけるんですつて！ 洒落ること

の上手な人が聞いたたら、頭へくつつけるのなら、丸太よりも角がよからう

といひませうよ。

ギンセ 花嫁御さん、それで吃驚りして目が覚めましたか？

ビヤン はい、けれども怖えはしませんかつたのですから、又眠ますでせう。

ペトル いや、眠かしませんよ。そつちからお始めなすつたからは、一つ二つ苦い奴をお見舞申しますぞ。

ビヤン (つツと立上つて) あなたの小鳥ぢやなくつてよ。わたし止り木を取變へますわ。弓を持つておつかけていらつしやい。……どなたもよういらつしやいました。

ビヤンカ、カサリン、後家ら入る。

ペトル いはうとしたことを先を越されてしまつた。……ツラニオ、君はあの小鳥を覗つただけけれど、射止め得なかつたらう。だから、祝盃を擧げるよ、覗つて而うして射そこなつた連中のために。

ツラ お、あなた、主人のルーセンシオは手前を獵犬扱ひにして先へ突走らせたのでございます、獲物を捉せましたために。

ペトル 好いね、敏捷く答へたね。が、すばやいだけに、大ぶ犬臭い比喩だ。

ツラ あなたは御自身でお手をお下しになりましたでけつこうでございましたが、其鹿は大ぶ手剛だとか承はりましたが、いかゞでございませう？

バフチ お、ほ、ペトルキオ！ 一本参りましたな。

ルー ツラニオ、有りがたう、うまく諷刺けたね。

ホオ (ペトルキオに) 一本やられたと白状なさいよ。

ペトル 成程、ちよつびりやられたね。が、今の嘲語が僕の身體からは逸れツちまつたと同時に、其實、それが君たち二人の身には適中してるんだといふことに氣が附かんかい？

バフチ いや、戲談でなく、真面目にいひますが、(ペトルキオに) 婿どの、お前さんはお氣の毒だ、無類の我儘者を妻にしなすつたわけだから。

ペトル い、え、決して、そんなことはない。ですから、其證明のために、めい、

が改めて新婦を呼寄せることにしませう。さうして、迎ひにやるや否や、すぐに真先にやつて来るのを最も貞順な妻と見做して、今こゝで、そのめいゝの夫が互ひに賭けた物を取るといふことにしたら、どうです？

ホオ よろしい。賭の額は？

ルー 二十クラウン。

ペトル たつた二十クラウン！ それッばかりなら鷹や獵犬にだつて僕は賭ける。妻になら其二十倍を賭けよう。

ルー ちや、百クラウン。

ホオ よろしい。

ペトル 約束しましたぞ！

ホオ だれから始めますか？

ルー わたしから始めよう。……ピオンデロー、奥さんと呼んで来な、おれが用が

あるツて。

ピオン かしこまりました。

入る。

バプチ (ルーセンシオに) 婿どの、わたしはお前さんの分の半分を負擔しませう、ピヤンカはすぐ來ますよ。

ルー 半端は好みません。全部わたくしが負擔します。

ピオンデロー 又出る。

どうだい？ 何てつたい？

ピオン 奥さんがおつしやいますには、今は忙しいから行かれないと。

ペトル え！ 忙しいから往かれないツて！ それが返辭かい？

グレ 大ぶ情の深い返辭だね。あんたの妻君が尙それ以上のわるい返辭をよこさないやうにお祈りをなさいよ。

ペトル なアに、きつといふ返辭をしますよ。

ホオ ビオンデローどん、わたしの妻に、すぐこゝへ来るやうにいつて下さい。

ビオンデロー 入る。

ペトル お、ほ！ 歎願なさいよ！ さうすりやきつとやつて来るだらうからね。

ホオ ところが、君のと来ちや、いくら君が歎願したつても、やつて来やしないだらう。

ビオンデロー 又出る。

妻はどこへ来ましたり？

ピオン 奥さんがおつしやいますには、何か戲謔してからかはうといふんでせう、こちらからは往きません、そちらからやつていらつしやい、とさういへといふお吩咐でございます。

ペトル (笑つて) ますますくゝわるいや。こつちからは往きませんと来た！ どうも酷

いねえ、たまらないねえ。到底忍ぶべからずだね！…おい／＼、グルミ、オ、奥さんのとこへ往つて、おれがこゝへ来いと命じたといつて来い。

グルミオ 入る。

ホオ その返辭は分り切つてゐる。

ペトル どうり？

ホオ 「いやです」といひます。

ペトル さういふ目に逢つたが最期、萬事休す矣だ。

バプチ (二方を見て) おや／＼／＼！ カサリンが来ましたよ！

カサリン 出る。

カサリ (ペトルキオに恭しく) 何の御用です、お呼びになりましたのは？

ペトル お前の妹は何をしてゐる？ ホオテンシオの妻君は何處にゐる？

カサリ 奥の座敷の爐のそばで話をしてゐなさいます。

ペトル 二人とも連れて來な。いやだなんぞといつたら、手ひどく撲り附けて、亭主たちのところへ引張つて來な。さ、早く往つて、二人をこゝへ引立て、來な。

カサリン 入る。

ルー これアどうも不思議だ！ こんな不思議なことはない。

ホオ 全くです。何の前兆だらう？

ペトル 平和の前兆さ、愛の前兆さ、家庭圓滿の、畏敬すべき支配力の、正しい主上權の前兆さ。要するに、うつくしく且つ楽しい、ありとあらゆるものゝ前兆さ。

バプチ さ、さ、仕合せ者におんなさい、賭はお前さんの有だ。わたしから更に二千クラウンを附加へます、彼等が損をしたものゝ外に。別の我女へ遣はす別の持參金として。といふのは、まるで別人のやうに彼女が變つた

のですから。

ペトル いや、賭に勝つたといふ證據を更に一層明瞭にしませう。彼女がどんなに柔順な、どんなに貞淑な婦人と生れ變つたかを御覽に入れませう。：：あ、あそこへ諸君の我儘な妻君たちを、うまく説落して、捕虜にして連れて來ましたよ。

カサリン 先にピヤンカと後家と附いて又出る。

カサリン、お前さんの其帽子は似合はないよ、そんな玩具のやうなものは抛り出して踏みにじつておしまひ。

カサリン 命の通りにする。

後家 (大不平の體で) ほんとにく、こんな馬鹿々々しいことツたらありやしないわね！

ピヤン (ルーセンシオに) どうしたといふんですのよ、わたしを無理に呼立てたり何か

して？ 馬鹿らしい！

ルー もつと馬鹿らしくしてゐて下さるとよかつたんだ、ビヤンカさん、あんたがそんなに怜悯がるもんだから、夕食から今までの間に、賭をして、わたしア百クラウン損しツちまつた。

ビヤン ま、わたしを引合に賭なんかなさるなんて、尙と馬鹿らしい人だわ、あなたは。

ペトル カサリン、わたしが命じます、この剛情張の婦人連に、女といふ者は、夫たり君たる人に對しては、どういふ義務を負つてゐる者であるかを話しておやり。

後家 もしくおふざけなさるなよ。聽くにや及びませんよ。

ペトル さ、さ、はじめたり。先づ、彼女にいひな。

後家 いひなさるもんですか！

ペトル いゝえ、きつといひます。…先づ、彼女にいひな。

カサリ (後家に) ま、いやな、何ですぞねえ！ そんな見ツともない顔をなすつて！

額にそんな八の字を寄せて、慳貪さうな、怖い顔をして、さも人を賤蔑んだやうな鋭い目附をして、自身の主人であり、殿さまであり、王さまである方を傷けようとなさるな。そんなことをなさると、美麗な顔が臺なしになりますよ、霜解けで牧場が穢くなるやうに。あなたの評判がめちやうになりまますよ、旋風で美しい蕾が吹散らされてしまふやうに。決して似つこらしくも、見よくもありませんよ。女の怒つたのは、泉が引掻廻されたのに似てゐます、汚くて、穢くツて、見ツともなくつて、美しいところは少しもなくなつてしまひます。そんなになつてゐる間は、どんな女早りのする男だつて、いかに女に渴したからつて、そんな女を只の一滴だつて、掬つて飲まうとはしませんよ。御亭主はあなたの殿さまです、あなたの性命

です、あなたの監督者です、あなたの頭です、あなたの君王です、あなたの爲に心配をし、あなたを養つて行くために、海上または陸上の勤務に身を委ねて、あなたが家で暖く安全に横になつてゐる間に、暴風の夜を眠ないでゐたり、嚴寒の日にも勞苦を厭はない人です。而もあなたからどういふ貢をも求めないので、愛と機嫌のいゝ顔の色と心からの貞順の外には、負債高の多い割合には、少過ぎる支拂です。つまり、臣民が君主に負ふ所のそれと同じ義務を、女は夫に負うてゐるのです。ですから、妻が剛情で、怒りッぽくて、ひねくれて、氣むづかしくて、夫の正しい意志に順はないやうなら、それは不逞な謀叛人でなくて何でせう、仁君に對する忘恩の反逆者でなくて何でせう。わたしは女が、愚かにも、よろしく平和の爲に拜跪すべき場合に、開戦したり、よろしく奉仕し、愛敬し、柔順にすべき場合に、支配や主權や威力を要求したりするのを、恥かしいことだと思ひ

ます。そもくわたしたちの肉體はなぜ柔く、孱弱く、滑くて、此世の中の勞苦に堪へるに適しないでせう？ つまり、わたしたちの性情がさういふ外形にふさはしく生れ附いてゐるが故でなくて何でせう？ さ、さ、剛情なばかして何の役にも立たん蟲けらさんたち！ わたしの料簡も、わたしの心も、あなたうち同様に思ひ上つてゐて、一言々々に口答へをしたり、男を睨み返したりしてゐた日もあつたのですが、幾らかあなたうちより理性が多く働いてゐたのです。今になつては覺りました、わたしたちの投槍は藁しべです、わたしたちの力は藁の力のやうに微弱です、その微弱さは比べ物がありません、非常に強いやうに見えてゐて、其實は、極めて微弱なのです。迎も駄目ですから、高慢な料簡をやめておしまひなさい、さうしてめいゝの御亭主の足の下へめいゝに手をお置きなさい。その義務のしるしに、夫の望みなら、わたしはいつでも此手を踏みにじつて貰は

うと思つてゐます。

ペトル 感心々々！ さうなくちやならんのだ。 さ、さ、ケート、キッスをおし、キッスを。

ルー めでたくお榮えなさい。 勝利は君のものだ。

ギンセ 今のは至極耳寄りの説法だった、子供らに聴かすには。

ルー けれども大ぶ耳の痛いお説法でした、剛情な我儘な女連には。

ペトル さ、さ、ケート、寢室へ往かう。……(ルーセンシオに)二人一しよに結婚したが

(とホオテンシオに)君たち二人は萬事休すだ。(とだんく、浮れて、調子づいて)圖星に中てたは足下だけれども、賭は此方へそツくり頂戴。勝つた以上は長居は恐れた。……はい、どうぞ、御機嫌よう！

ペトルキオはカサリンの手を取りつゝ、勝誇つて入る。

ホオ さ、さ、めでたくお榮えなさい。 名代の悍馬を馴らし附けてしまつたん

だからね。

ルー (メプチスタに)かういつちやア何ですが 全く不思議す、カサリナさんがあんなに柔順におなりになつたのは。

みなくはひ 皆々入る。

* * * * *

ぎやく馬馴らし(完)

大正九年十一月五日印刷
大正九年十二月八日發行

(製複許不)

附與しら馬やぶやぶ
錢拾五圓貳金價正

譯者

東京市牛込區余丁町百十四番地

坪内雄藏

發行者

東京市小石川區音羽町四丁目十一番地

荒川信賢

印刷者

東京市牛込區榎町七番地

渡邊八太郎

發行所

東京市牛込區
早稻田

早稻田大學出版部

(振替口座東京二二三三番)

印刷社會株式

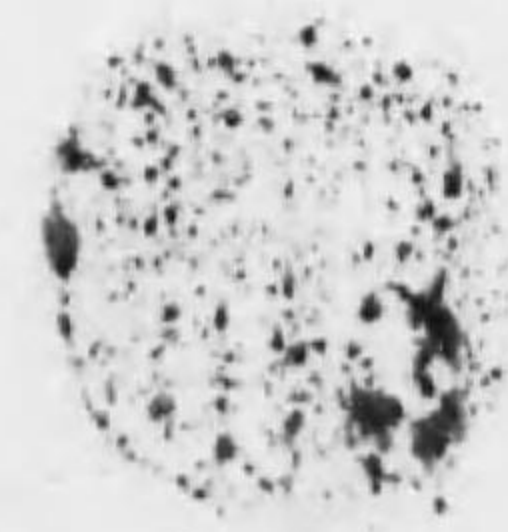


所 捌 賣

東 東 東 東 東 東
京 京 京 京 京 京
神 神 神 神 神 神
田 田 田 田 田 田
橋 橋 橋 橋 橋 橋

富 東 至 北 東 盛 星
山 京 誠 隆 海 文 野
房 堂 堂 館 堂 館 星
堂 堂 堂 堂 堂 堂

(其 他 各 地 書 肆)



終